

神人あいよかけよの生活運動

願
い

御取次を願ひ頂き

神のおかげにめざめ

お礼と喜びの生活をすすめ

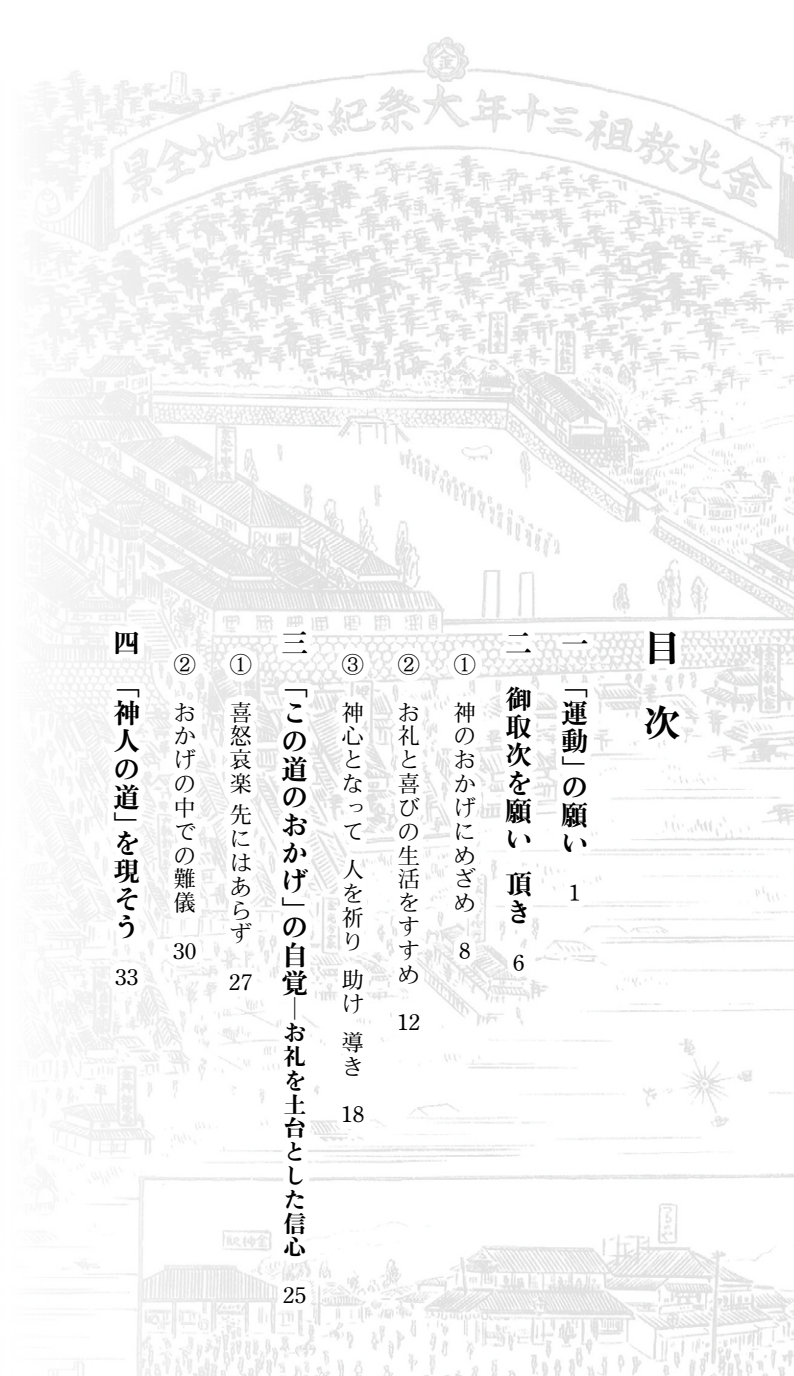
神心となつて人を祈り助け導き

神人の道を現そう

「神人の道」を一人ひとりの生活に

KONKOKYO

神人あいよかけよの
生活運動パンフレット



目次

- 一 「運動」の願い 1
- 二 御取次を願い 頂き 6
 - ① 神のおかけにめざまめ 8
 - ② お礼と喜びの生活をすすめ 12
 - ③ 神心となって 人を祈り 助け 導き 18
- 三 「この道のおかけ」の自覚 お礼を土台とした信心 25
 - ① 喜怒哀楽先にはあらず 27
 - ② おかけの中の難儀 30
- 四 「神人の道」を現そう 33

一 「運動」の願い



平成二十四年一月一日をもって、「神人かみひとあいよかけよの生活運動」が発足しました。この「運動」の願いとするところは、立教百五十年（平成二十一年）のお年柄に教主金光様がお示しくくださった「神人の道」のおぼしめしを頂き、私たち信奉者が「神人あいよかけよの生活」を求め現していくことで、現代に生きる一人ひとりの生活に神と人との関係を再構築していくことです。

教主金光様は、人間関係に悩むある信奉者に、「縦軸は神様と人、横軸は人と人がつながっています」とご理解されています。「縦軸」である神様と自分との間柄を深め、その中身をもって「横軸」である人間関係や生活上の諸問題に取り組んでいくところに、この道の「助かり」の世界が開かれてくるのです。

この度の「運動」では、「縦軸」を見失ってしまった現代社会にあって、私たち一人ひとりが、御取次おんとりつぎを願い、頂くことをとおして、神様と自分との間柄を深め、それぞれの生活に「神も助かり、氏子も立ち行き」と神様が仰せられる「神人の道」を現していくことを目指して、次のように「運動」の「願い」を掲げています。

願 い

御取次おんとりつきを願 い 頂 き

神のおかげにめざめ

お礼と喜びの生活をすすめ

神心かみこころとなって 人を祈り 助け 導き

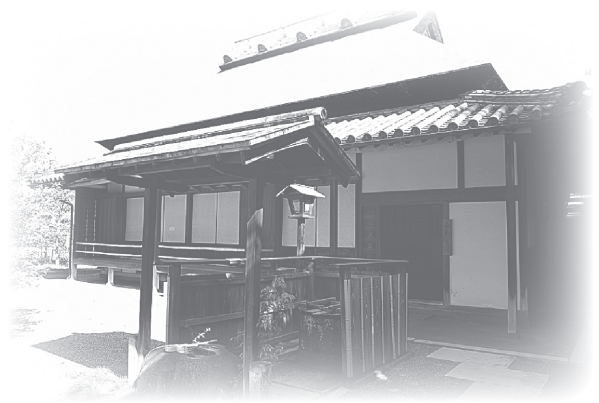
神人かみひとの道を現そう

この「願 い」は、教祖様に始まるこの道の信心と「助かり」の筋道を要点的に表現したものです。この道は、生神金光大神取次の道であり、どこまでも「御取次を願 い 頂 き」ということが基本とな

ります。また、「神のおかげにめざめ」とは、天地金乃神様のおかげの世界に目覚めるという世界に目覚めるということなのです。

御取次を願 い、頂 いて、天地金乃神様のおかげの世界に目覚めるところから、「お礼と喜びの生活」が始まり、そのことが進められていけば、「縦軸」である神様と自分との間柄が次第に深められていきます。そして、「お礼と喜びの生活をすすめ」る中で、「神心と なって 人を祈り 助け 導き」という信心実践に取り組めば、周囲に「助かり」の世界が生まれてきます。それが、そのまま現代社会に「神人の道」を現すことになります。

二 御取次を願い 頂き



「御取次を願い 頂き」ということは、このたびの「運動」の出発点であり、基盤でもあります。では、御取次を願い、頂くことをとおして「神人の道」を現すとは、具体的にどういうことでしょうか。

ここでは、その内容や意味合いについて、「神のおかげにめざめ」「お礼と喜びの生活をすすめ」「神心となって 人を祈り 助け 導き」の三つを焦点に、教祖様の御取次の実際から頂いてみます。

① 神のおかげにめぐみ

光政村（現岡山市）在住の利守志野師としもりしのは、長男が七歳の時に小児結核と診断されました。当時、結核は死の病とされ、母親の志野師は何とかわが子を助けたいと、いろいろな神仏に参拝し、また、何人もの名医を訪ねました。しかし、一向に回復の兆しは見えず、長男が十歳の時、慶応二年（志野師二十七歳）の夏に初めて教祖広前に参拝し、長男の病氣回復をお願いしました。

この時、教祖様は、「お天道様てんどうのお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげ、人間はみな、おかげの中に生かされて生きている」と、長男の病氣のことには一切触れられず、天地のおかげ、神様のおかげの中に生かされて生きている人間についてのお話ばかりをされました。最初、志野師は、教祖様のお話がよく分かりませんでしたがお話を聞いているうちに、「これは大変なことをおっしゃっているんだ」と思えてきたところへ、「人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである」と、教祖様のご理解があり、愕然がくぜんとさせられたということです。

というのも、教祖様の御取次を頂くまでの志野師は、おかげと言えば、息子の病氣が治ること、生活上のいろいろな問題が解決する

ことだと思い、自分たち親子の命と生活を支え続けてくださったという天地のお働き、神様のおかげのことなど考えたこともなかったのです。それどころか、自分たちは、ただただ一生懸命に、真っ正直に生きてきたのに、どうしてこのように難儀な目に遭わなければならないのかと思い、世間を恨み、神様を恨んでいたということです。

しかし、教祖様の御取次を頂き、自分の正体に気付かされた志野師は、教祖様、神様に対して「これからは改めて、神様にお礼を申し上げる生活に切り替えます。倅せがれにもよく聞かせまして、これから信心させて頂きますから、よろしくお願いいたします」と申し上げたのです。そして、家に帰り、長男に教祖様のお話を語り、親子で、

日々生かされていることにお礼を申す生活を始めました。また、月に一、二度、教祖広前に参拝するようになり、以来、長男の病気は一日一日と良くなり、周囲の人も驚く中、病気全快という「おかげの事実」が生まれていったのです。

* * *

この伝承からは、わが子の病気で世間や神様を恨んでいた一人の人間が、「神のおかげにめざま」る姿が具体的に浮かび上がってきました。志野師は、教祖様の御取次をとおして、自分の思いを超えた天地のお働き、神様のおかげの世界へと導かれ、天地金乃神様のご神徳の中に生かされてきた自分たち親子であることに目覚めたのです。

② お礼と喜びの生活をすすめ

明治六年旧九月、西阿知村（現倉敷市）在住の荻原須喜師（当時二十一歳）は、血の道（婦人病）で二年間、病床に呻吟しんぎんしていました。それまで、いろいろな神仏に参拝し、医師の手当も受けましたが、病気は重くなるばかりでした。ある時、綿買商人から、教祖様のところでおかげを受けるようにと勧められ、父親の利喜三りきざうさんが初めて教祖広前に参拝し、お願いしました。

しかし、それから百日経っても、病気はよくも悪くもなりません。利喜三さんは、「これは、やっぱりいけん」と思いましたが、「ま

あ今一度参ってみよう」という気になって、再度参拝しました。

教祖様は、「よう参られたが、お前（利喜三）に話してもわからぬ」から、とにかく「一ぺんだけ連れそう亭主（豊松とよまつ）を参らせんさい（参らせなさい）」と話されました。

翌日、夫の豊松師が参拝すると、教祖様は、「巳みの年（豊松）、お前方には信心ができるか」と投げかけられ、「お前方の信心は一心になっておらぬ。日本国中の神仏に信心すると言うが、それはあまりの信心じゃ」と、「一心の信心」ということについて懇々と諭されました。そのうえで、「今一つ言うて聞かせにゃならぬことがある。丑うしの年（須喜）はまことに執念な者で、常に不足ばかり並べて

おるが、不足にはおかげはない」と言われ、須喜師の不平不足の生活に触れながら、「それじゃから、病気もしておるのじゃ。ようもならぬのじゃ。いんで（帰って）、丑の年に言うてみい。そうして、丑の年が、なるほど私は悪かったということが腹の底から得心がいったら、家内中相談のうえで好きな所へ信心せよ」と諭されたのです。

* * *

人間誰しも病気になる、その難儀に心を奪われてしまいます。まして闘病生活が長く続くと、知らず知らずのうちに世話をする家族の思いや苦悩が分からなくなり、不平不満が募り、家族を責め立

てて一層難儀の淵へと沈み込んでしまうこともあります。教祖様は、そのような「わが心」の問題を見据えるところから、「不足におかげはない」と、はっきり示されたのです。

教祖様の御取次をとおして、それまでのあり方が本当の信心になっ
ていなかったと悟り、不平不足の生活におかげはないことを得心
した豊松師は、家に帰って一部始終を物語りました。その話を聞いた
須喜師は、天地一目に見ておられる神様に出会い、「なるほど、
もっともです。私はまことに悪い者でありました。ねじけ根性であ
りました。ほんにご無礼な心を持っておりました……改心せんでど
うしますか」と自らを深く省み、「お礼と喜びの生活」への改まり

を決意したのです。

こうして、教祖様が「三週間を楽しんでおかげをいただきなさい」と諭されたとおり、三週間目には「おかげの事実」が生まれたのです。その喜びから夫婦でお礼の参拝をした須喜師に対して、教祖様は、「もう、今まで長う痛うてつらかったことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れなよう。その二つを忘れさせにや、その方の病気は二度と起こらぬぞよう。これからのう、人が痛いと言うて来たら、自分のつらかった時のことと、おかげを受けてありがたい時のことを思い出して、神に頼んでやれ。われはもう治ったから人のことは知らんというような心を出すと、またこの

病気が起こるぞ。今の心でのう、おかげを受けていけば、病気が起こらぬばかりじゃない。子孫の末までおかげを受けられるぞ」と諭されたのです。

* * *

「丑の年、痛いのが治ったのありがたいのではないぞよう。まめ（健康）なのありがたいのぞよう」とは、同じく須喜師が伝えた教祖様のみ教えですが、このみ教えと共に、「今まで長う痛うてつらかったことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れなよ」という教祖様のお言葉は、「お礼と喜びの生活をすすめるうえでの大切なみ教えと頂けます。

③ 神心となって 人を祈り 助け 導き

大阪で金物屋を営んでいた福嶋儀兵衛師は、酒井佐吉氏の導きで入信し、その後、ぜひ一度教祖様を拝して教えを頂きたいと、明治二年七月（当時三十九歳）、初めて教祖広前に参拝しました。お広前で儀兵衛師が、「前年来ご縁をいただき、おかげを受けている事情」についてお礼を申し上げると、教祖様は、神様にお届けのご祈念をなさり、次のような一連のみ教えをお示しになりました。

* * *

「人は此方のことを生神であると言うが、此方でも、あなた方と同じ生身の人間である。信心しておかげを受けているまでのことである。……あなたも、神様の仰せどおり真一心に神信心しておかげを受け、人を助けて神にならせてもらおうがよい」

「人間はみな天地金乃神様から人体を受け、御霊を分けていただき、日々天地の調べてくださる五穀をいただいて命をつないでいる。昔から、天は父なり、地は母なりというであろう。天地金乃神様は人間の親様である。此方の信心をする者は、一生死なぬ父母に巡り会い、おかげを受けていくのである」

「天地金乃神様は天地を一目に見とおし、守っておられる。人間は

神の氏子、神様のおかげを身いっぱい受けるように、この身この心を神様に向けて信心せよ。何事も無礼と思わず一心に取りすがっていけば、おかげが受けられる。枯れ木にも花が咲くし、ない命もつないでいただける。わが身におかげを受けて、難儀な人を助けてやるがよい」

「神様を拝礼するには、此方では別に決まりはない。実意丁寧正直、真一心がかなめである。日々生かしてもらっているお礼を申し、次に、お互い凡夫ほんぶの身であるから、知らず知らず、ご無礼お粗末お気障りなどをしている道理、それをお断りおわび申して、それがすんだら、身の上のことを何かと実意をもってお願いさせてもら

うがよい」

* * *

このように、教祖様は、この道の信心や「助かり」の筋道について、順を追って説き諭されています。まず最初に、「生神」ということについて、それは特別なことではなく、「信心しておかげを受けているまでのこと」と言われ、「あなたも、神様の仰せどおり真一心に神信心しておかげを受け、人を助けて神にならせてもらうがよい」と諭されています。これは、先の荻原須喜師に対する「これからのう、人が痛いと言うて来たら、自分のつらかった時のことと、おかげを受けてありがたい時のことを思い出して、神に頼んでやれ」

というお言葉に通じるものです。

次いで、教祖様は、「人間はみな天地金乃神様から人体を受け、御霊を分けていただき、日々天地の調えてくださる五穀をいただいて命をつないでいる」と、「縦軸」である天地金乃神様と人間との間柄を説かれ、「人間の親様」である天地金乃神様を信心する者は、「一生死なぬ父母に巡り会い、おかげを受けていくのである」と諭されます。

また、「天地を一目に見とおし、守っておられる」という天地金乃神様のご神徳の中に生かされている「神の氏子」である人間が、「神様のおかげを身いっぱい受けるように、この身この心を神様がよい」と促されています。

さらに、「神様を拝礼する」には「実意丁寧正直、真一心がかなめである」として、日々生かされているお礼を申し、知らず知らずの「ご無礼お粗末お気障り」などへの「お断りおわび」をし、そのうえで「身の上のことを何かと実意をもってお願いさせてもらうがよい」と諭されているのです。

以上のように、おかげを受けて「お礼と喜び」の心をもって初めて参拝してきた氏子に対して、教祖様は、懇々とお道案内をされな

がら、「神心となって 人を祈り 助け 導き」という信心へと導
いていかれたのです。

三 「この道のおかげ」の自覚 — お礼を土台とした信心



『神人の道』とは、どういうことでありましょうか」と御取次を願ったある教師に対して、教主金光様は、「世話になるすべてに敬礼を言うことです」とご理解されました。

教主金光様は、「世話になるすべてに礼をいうところ」との四代金光様のお言葉を、わが身わが生き方をもって現され、「お礼を土台とした信心」に基づく御取次をお進めくださっているのです。

では、「神人の道」を現すことと、「お礼を土台とした信心」とは、どのように関わるのでしょうか。ここでは、四代金光様のご理解を頂きます。

① 喜怒哀楽先にはあらず

「喜怒哀楽というものは、目がさめて後のことであり、喜怒哀楽を土台にしてはならんとしみじみ思うのであります」

「喜怒哀楽先にはあらず賜^たびしいのちありてめざめてのちのことなり」

* * *

この「喜怒哀楽」とは、喜怒哀楽の人生ということです。人間誰しも、素晴らしい人生や充実した人生を歩みたいと願って、いろいろなことに取り組み、その過程や結果に一喜一憂を重ねていくので

すが、ここで四代金光様は、喜怒哀楽の人生が先にあるのではなく、神様から頂いた「賜びしいのち」、神様のおかげの中に生まれてきたこの命ということがまず先にあり、その「賜びしいのち」が神様のおかげの中で目覚めさせてもらってから後のことである、とおっしゃっているのです。

私たち人間は、自分の生活、自分の人生といって、いろいろなことに取り組み、問題にも出遭いながら、それぞれに喜怒哀楽の人生を歩んでいますが、その生活や人生は、天地のお働き、神様のおかげの中に生まれてきた「賜びしいのち」と、その命が朝の「めざめ」を頂くことから始まっている。それが、私たちの命と生活の原点で

あり、真実でもある。そのことに気づき、目覚めて、神様にお礼を申し上げる。そのお礼を土台として、願いをしながら、日常の生活に取り組みせてもらう。そのような生き方の大切さが、わが身わが心に染み込んでくれば、そこに自ずと「助かり」の世界が開かれてくる。それが「お礼を土台とした信心」ということです。

まず第一に生かされて生きるということが先にあって、その中で人間は喜ぶこともできるし、反対に悲しむことができ、病気になることもあるのです。つまりは、喜怒哀楽の人生を歩むことができるのであり、その道理を、四代金光様は、「喜怒哀楽を土台にしてはならんとししみじみと思う」とおっしゃっているのです。

② おかげの中の難儀

「おかげの中で難儀をしておるから助かるのであります。難儀の中におるのであったら、どこへいっても難儀であって、どうすることもできないのでありましようが、天地の限りなき恵み、教祖様のおかげ、そういう中でいろいろなことが起っているのであります」

* * *

この「難儀の中におる」とは、困ったことや難儀なことが起きてくると、その問題に心を揺るがされ、時にうろたえてしまい、問題のとりこになってしまう状態のことを言われています。先の利守志

野師のことで言えば、息子の病気に心がとらわれ、病気が治ることだけがおかげだと思い込んで、目の前しか見えなくなっている状態のことです。また、先の荻原須喜師であれば、二年間も病床に呻吟し、その苦悩から病気に心を奪われ、不平不満を募らせながら家族を振り回してしまう状態のことです。

そういう難儀の中にいる限り、「どこへいっても難儀であって、どうすることもできないのでありましよう」とおっしゃっているのです。

けれども、たとえ自分がどんなに厳しい境遇に置かれているとしても、「天地の限りなき恵み」の中に生かされているお互いであることからすれば、困ったことや難儀なことも、天地のお働き、神様

のおかげの中で起きていることなのです。さらに言えば、「教祖様のおかげ」、教祖様につながるこの道にご縁を頂き、おかげを受けてきている中でのご縁であり、だからこそ、そのことに気付いて信心すれば、「助かるのであります」とおっしゃっているのです。

このようにお示しくくださった「お礼を土台とした信心」は、世間一般で言われる「感謝の心」を包み込みながらも、それとは大きく異なる、天地金乃神様と人間氏子との間柄に根ざしたこの道の大切な信心実践です。そのような実践を、私たち一人ひとりが生活の中に求め現していけば、現代社会に「神人の道」を現すことになるのです。

四 「神人の道」を現そう



最後に、ここまでの内容をもって、「願い」の最終行にある「神人の道を現そう」に関わって、教祖様のみ教えを頂きます。

「おかげを受けるのに巧者がある。だれでもおかげをいただきたいら、そのありがたいということをいつまでも忘れないようにせよ。それを忘れたら、もういけない。後のおかげはいただけない。それさえ忘れなければ、おかげは思うようにいただける」

* * *

ここで教祖様は、おかげを受けた後も、「そのありがたいということをいつまでも忘れないようにせよ」と諭されています。これは神様を忘れないようにということですが、そのためには、「わが心」

を神様に向ける稽古が大切です。教会のお広前に参拝し、御取次を願ひ、頂き、ご祈念を頂き、お話を頂き、神様のご用に使う頂くという信心の稽古をとおして、「縦軸」である神様と自分との間柄を深めていけば、新たな「おかげの事実」が生まれてきます。そのことが、そのまま「神人の道を現す」ことになるのです。

さらに、「ありがたい」の反対は、「あたりまえ」です。起きてきた出来事や事柄が当たり前のことではなく、有り難いこと、あり得ないことと受け止められる心を育んでいくところに、「ありがたい」という心持ちが生まれてきます。

四代金光様は、起きてくる出来事や事柄を含めて、今こうして息

ができること、食べられること、動けること、勉強ができること、仕事ができることなど、人間の諸々の営みすべてが「おかげの中のこと」と仰せられました。いわゆる特別なおかげに限らず、普段の生活そのものもまた、神様のおかげを受けて「できている」ことであり、だからこそ、その一つひとつにお礼を申すことが大切なのだと教えくださっているのです。

考えてみると、人間は、「あたりまえ」のことにはお礼を申しません。それが「ありがたい」ことだと気付かされて、初めてお礼が申せるのです。そのような人間の実際からすれば、私たち一人ひとりが日常生活の中で、いかに「あたりまえ」でないことに包まれて

いるかに気付き、お礼を申していくという実践に取り組むこともまた、「神人の道」を現していくことになるのです。

* * *

先に紹介した福嶋儀兵衛師は、初参拝から四年後の明治六年に、長男の病氣全快のお礼に参拝した時の教祖様のご理解として、次のように伝えていきます。

「神信心しておかげを受けて、難儀な人を助ける身にならせてもらうがよい。神心となって、受けたおかげを人に話して真の道を伝えるのが、神へのお礼である。それが神のお喜びとなる。信心するといっても、これまではみな神様を使うばかりで、神様に使われるこ

とを知らない。天地金乃神様は人を使わしめになさる。神様に使われることを楽しみに信心せよ」

* * *

この道では、信心しておかげを受けた者が「神心となって、受けたおかげを人に話して真の道を伝える」ことこそ、神様のお喜びとなるお礼の信心であるということです。神様は、一人ひとりの氏が、自分の願いを聞いてもらう信心、「神様を使う信心」から、「神様に使われる信心」へと進んでいくことを願われているのです。

直信、先覚、先師は、それぞれの悩み苦しみから救い助けられ、「神心となって 人を祈り 助け 導き」という実践に取り組まれ、

「神様に使われる信心」へと進んでいかれました。それは、どこまでも神様のお喜びとなる信心を求められてのことです。

四代金光様は、「くりかへす稽古のなかにおのづから生れ来るなり新しきもの」というお歌を詠んでおられます。繰り返す稽古が信心のうえにも大切であり、その繰り返しの中に、自分では思いもよらなかった「助かり」の世界が開かれてくるのです。

全教の信奉者が、「運動」の「願い」をもとに、繰り返す信心の稽古をとおして、神様と自分との間柄を深め、一人ひとりの生活に、さらには現代社会に「神人の道」を現していくおかげをこうむらせていただきたいと存じます。

編集／発行 ■ 金光教本部教庁

〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷320

TEL 0865-42-3111 FAX 0865-42-4419

E-mail w-master@konkokyo.or.jp

URL <http://www.konkokyo.or.jp/>